島根大学教育学部紀要（教育科学）第6巻 143—163頁 昭和47年12月

学童の低体位地区に関する比較研究（Ⅱ）

福井一明・團　琢磨
織奥信男・喜多村望

Kazuaki FUKUI. Takuma DAN. Nobuo ORIOKU and Nozomu KITAMURA :
A Comparative Study on the Physical Development
of School Children in Sanin District. (II)

Ⅰ　研究の経緯と視点

本研究は学童の低体位性を生みだしている地区に関する研究である。

(1) われわれは前報［学童の低体位地区に関する比較研究（Ⅰ）］において，子どもの身体的発育，特に体位の変動について考察をすすめるため，地区住民の生活構造を検討してきた。

すなわち，子どもの生活基盤がもつ基本的諸特性が，子どもの発育にとって意味をもつであろうという前提のもとに，子どもの両親の生活実態を要素的に明らかにしようとした。

課題の追究において，体位の変動に係わる作用要因として，「生活様式の近代化，生活水準の向上」を最も重要な基本概念として位置づけた。このような観点から，生活概念をより具体化し，とくに子どもの体位変動の事実と結びつけるために，地区のレベルで生活の実態を把握しようとした。それは子どもの体位について巨視的立場からする観察のひとつの規準である。

調査研究の対象地区は，子どもの低体位性が比較的顕著で，しかも地区の規模（子どもの人数）が適切であることに留意し，比較対照地区もそれとほぼ等しい条件を具備している地区を選んだが，総じて何れの地区の選定において任意的性格をもっていた。

両親の生活構造の分析と検討は，生活時間とその内容の検討，文化的，保健的生活，生活適応の実態について主として意識と行動・実践の側面から考察してきた。文化的要因として特に社会体育の見地から地区のスポーツ活動が検討された。これらの結果は，包括的な意味で低体位性と何等かの関連が示唆されるかも知れないことが期待されたが，結果的に斉一な関係は極めて稀薄であった。調査結果を概括的にみると，次のようになった。

①全体として生活の時間的ゆとりに乏しく，余暇利用の特徴は，マスコミ・休息型が中心であり，余暇に対する消極的態度が著るしい。

②スポーツに対しては，消極的態度が共通しており，自発性に乏しく，外から提供されたスポーツ・プログラムに誘引された活動型態が多い。

③保健認識全般については性差が著るしく，女子の成績がよい。また，地区レベルでの保健

活動の実績と平行して，認識の水準に地区間差を生みだしている傾向がある。

④子どもの「からだ」に対する保護者の認識は，必ずしも低いとはいわれないが，認識内容に矛盾傾向のあることが指摘でき，子どもの生活管理面で全般に農家が劣る傾向を示した。(注8)

このような結果の要約にみられるように，そこには自づから共通した農山村住民の生活様態があらわれていた。すなわち，農村における生活にはゆとりが乏しく，労働条件に不利である事実について，「多忙」がそれを象徴していることである。とくに農業従事者の出稼と臨時雇など変則的な労働の型は，こんにちでは最早一時的現象ではなくなり，恒常的な農村住民の就労形態として定着しているのが実状であった。

斯うして，子どもの地区における生活基盤の解明のために，所与の条件の範囲でその実態の理解に重点がおかれたが，資料の示す限りにおいて，低体位性に直接関連するとおもわれる顕著な特質は対象地区間にはみられなかった。しかしながら，調査成績の比較において農業および非農業の従事者の差が明瞭であったことを特記したい。

そこで学童体位の改善が，人々の意図的努力と対応する課題であるならば，当然その本質は生活構造全体の改善に求めなければならない。ここに学校および家庭の生活乃至教育機能と実践的に結びつく契機として考察の結果を位置づけることができると思われる。

(2)　今回は当該調査地区における小学校児童の生活実態を中心に考察をすすめる。ただし前報でとりあげた島根県内7地区にたいして，更に松江市大野地区および生馬地区を加えた。（図1）（第1～2表）

この調査は，「生活と健康のしらべ」と「生活とスポーツのしらべ」の2部からなり，子どもの生活の基本的な事項から内容構成した。

質問紙への回答は，教室での集団調査方式によった。調査対象は調査内容の理解，回答に十分であることを考慮して，特に小学校第5および第6学年生全員とした。調査は昭和45年11月から12月に到る期間に実施された。

各学校における調査対象人員は次表の如くである。（第1表）

第1表　調査対象校と人数（小5・6年生）

	池田	志学	口羽	中野	吉田	持田	秋鹿	大野	生馬
男子	27	23	35	35	33	36	34	41	29
女子	22	19	37	28	24	34	30	30	30

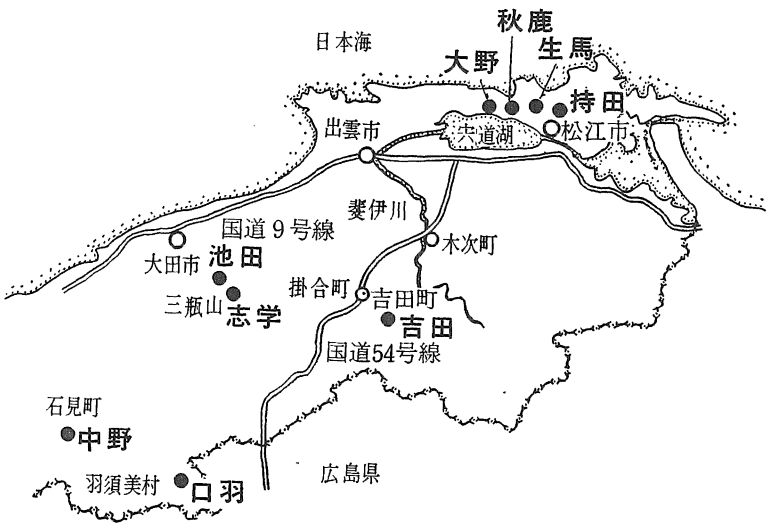
調査結果は，男女別に，体位に関して下位地区群と上位地区群(※註1)ならびに山村地区群と近効農村地区群をそれぞれ対置させた。これらの基準による地区の分類は次のようになる。

第2表　調査対象地区

体位下位地区群	池田・志学・口羽・持田・大野・生馬
体位上位地区群	中野・吉田・秋鹿
山村地区群	池田・志学・口羽・中野・吉田
近郊農村地区群	持田・秋鹿・大野・生馬

（以下，上位地区ならびに下位地区と称する）

図1　調査対象地区



Ⅱ　結　果　の　考　察

1.　生活時間

子どもの生活で勉強を優位におき，遊びや運動を二次的なものとする考え方は，今日までの社会的通念であったといってよい。しかし，このような傾向は変わりつつある。

子どもの生活の現実をとらえるために，われわれはその手続きの1つとして時間の角度からも分析を試みた。生活時間調査の内容は，すいみん，家庭学習，手伝い，遊びであるが，それらの生活内容の習慣的な行動をたずねた。なお，遊びについては，テレビ視聴と運動的な遊びの2つによってみた。遊びに関して，体育的見地から特に関心をもつのは身体活動の量と種類であるが，運動的な遊びについては別章において検討することにしたい。

(1)　すいみん時間

曜日に関係なく一定のすいみん時間を確保することは人間の自然の姿であろう。全般的にみ

ると，すいみん時間は9時間～10時間のあいだに約6割のものが集中している。体位の発達で上位地域の子どものすいみん時間が下位地域に比較してやや長いといえるが，山村と近郊農村の地域差はほとんどみられない。

ところで，子どもは一体何時頃ねむりにつくのであろうか。全般的にみて，約半数がねむりにつく時刻は午後10時頃で，午後11時までには95%のものがねむりについている。

一方，半数のものが起きる時刻は7時頃で，7時30分までにはほとんど全員が起きている。1970年のNHKが行なった国民生活時間調査によれば，「ローテーンの半数がねむりにつく時刻は午後10時，半数が起きる時刻は6時半」(注3)となっている。われわれの調査結果をNHKの調査に比較させてみると，島根の農山村の子どもの方がやや朝寝坊ということになる。

地域別にみると，山村の子どもは約8割が午後10時までにねむりについており，近郊農村に比較すれば早くねむりにつく傾向がある。これとうらはらに，山村の子どもは，近郊農村の子どもに比較して早起きの傾向をみせている。しかしながら，体位の発達による地域間差は，すいみん時間および，就寝と起床時刻において認められない。

第3表　睡　眠　時　間　　(%)

性別	地域類型	調査対象人員	7時間未満	7・00～7・29	7・30～7・59	8・00～8・29	8・30～8・59	9・00～9・29	9・30～9・59	10時間以上	無答
男子	下位地区	191	1.0	1.6	3.7	8.9	20.4	27.2	23.6	13.6	0
	上位地区	102	0	2.0	1.0	8.8	13.7	36.3	30.4	6.9	1.0
女子	下位地区	172	0.6	0.6	1.2	12.8	16.3	33.7	23.3	11.6	0.6
	上位地区	82	0	0	6.1	3.7	15.9	29.3	35.4	9.8	0
男子	山村	153	0.7	1.3	2.0	10.5	18.3	34.6	23.5	9.2	0
	近郊農村	140	0.7	2.1	3.6	7.1	17.9	25.7	28.6	13.6	0.7
女子	山村	130	0	0.8	4.6	8.5	9.2	36.2	30.8	10.0	0
	近郊農村	124	0	0	0.8	11.3	23.4	28.2	23.4	12.1	0.8

(2)　勉強時間

NHKの調査によれば，平日における小学校5年生の勉強時間は，学校の授業5時間43分，課外活動及び自宅学習1時間20分となっている。(注4)

自宅学習時間を山村の子どもについてみると，授業以外で平日に1時間以上勉強するものは，男子46.4%，女子60.0%であるが，近郊農村の場合は，男子45.0%，女子43.6%で，都市化過程とは逆の傾向をみせている。

第4表　就寝時刻と起床時刻　(%)

性別	地域類型	調査対象人員	就寝時刻 9時以前	9・00〜9・92	9・30〜9・59	10・00〜10・29	10・30〜10・59	11・00〜11・29	11・30以後	起床時刻 6時以前	6・00〜6・29	6・30〜6・59	7・00〜7・29	7・30以後
男子	下位地区	191	5.7	25.7	35.6	15.2	10.5	4.7	2.6	3.1	17.8	29.9	42.8	4.7
	上位地区	102	3.6	26.5	33.3	17.6	14.7	1.0	1.0	2.9	7.8	42.1	42.1	2.9
女子	下位地区	172	5.8	22.8	38.0	15.2	14.6	3.5	0.6	1.2	14.6	34.9	48.3	1.2
	上位地区	82	6.1	24.2	43.9	14.6	8.5	1.2	2.4	2.4	9.8	35.4	46.3	3.6
男子	山村	153	4.6	35.3	37.9	9.8	8.5	2.6	1.4	4.6	23.5	41.2	26.8	2.6
	近郊農村	140	7.1	15.7	31.4	22.9	15.7	4.3	2.8	1.4	4.3	26.4	54.0	5.7
女子	山村	130	6.9	30.0	40.8	13.1	6.9	0.8	1.5	3.1	20.8	40.0	33.9	2.3
	近郊農村	124	4.8	15.3	38.7	16.9	18.5	4.8	0.8	0	4.8	29.8	62.1	2.4

さらに，体位の発達による地域類型によってみれば，1時間以上勉強しているものは，下位地域で男子49.2%，女子52.6%，上位地域で男子38.7%，女子52.2%になっているが，下位地域の勉強時間がやや長いとみてよかろう。たしかに，おしなべて勉強しているが，勉強ぶりはモーレツではない。

第5表　家庭学習時間　(%)

性別	地域類型	調査対象人員	家庭学習 ほとんどしない	30分程度	40分程度	1・00時間程度	1・30分程度	2・00時間以上
男子	下位地区	191	7.3	15.2	20.4	20.4	18.8	10.0
	上位地区	102	2.9	32.4	17.6	15.7	12.7	10.8
女子	下位地区	172	2.9	22.2	22.8	26.7	16.6	9.3
	上位地区	82	3.7	28.0	15.8	11.0	19.5	20.7
男子	山村	153	2.6	20.1	17.0	17.6	15.7	13.1
	近郊農村	140	9.3	21.4	22.1	20.0	17.9	7.1
女子	山村	130	2.3	11.5	25.4	23.1	19.2	17.7
	近郊農村	124	4.0	37.1	15.3	20.2	15.3	8.1

(3)　手伝い

農村の子どもの生活時間について，昭和29年と昭和46年を比較してみると，総体的には自発的（自由）な時間が増加して，勉強と手伝いが減少している。(注5) 今次の調査によってみても，全般的に社会的拘束の度合はかなり弱まっていると考えてよいだろう。しかし，手伝いは男女によってかなりの差をみせている。つまり，社会的拘束にみられる男女差は，農山村ではなお解消されていないといえる。

第6表　手　　伝　　い　　(%)

性別	地域類型	調査対象人員	手伝い 毎日する	ときどき	ほとんどしない
男子	下位地区	191	19.9	69.8	7.8
	上位地区	102	28.4	61.7	10.0
女子	下位地区	172	33.7	62.2	2.9
	上位地区	82	47.6	50.0	2.4
男子	山　村	153	26.8	66.0	7.2
	近郊農村	140	18.6	67.9	11.4
女子	山　村	130	50.1	46.9	2.3
	近郊農村	124	25.0	70.2	2.4

手伝いを毎日するものは，山村が男女ともに高率を示している。体位の発達で上位地域の高率は，むしろ山村部の高い比率にもとずくのである。手伝いの内容のほとんどは掃除，風呂たき，食事の準備・あとかたづけ，家畜の飼育など，家事労働に集中している。したがって，山村においては，家事労働のある範囲を子どもが分担している場合が多いとみてよい。

(4)　テレビ視聴

現代っ子はテレビッ子であるといわれている。子どもは，野球やサッカー，ボーリングなどのスポーツについて，教師も驚くほどの知識や情報をテレビを通して手に入れている。テレビは子どもにマンガやドラマやスポーツ実況を提供するだけでなく，同時に商品知識を強くアッピールすることによって，購買欲求を刺激する。最近のマスコミ・とくにテレビの発達は，子どもの社会化の形態を一変させ，テレビによってつくりだされるレジャー文化への同調を通してのパーソナリテーの発達の度合が大きい。

NHKの調査によれば，「ふだんの日に国民平均では3時間5分テレビをみているが，ローテーン（10～15才）では2時間6分である。しかし，日曜になると，1時間以上ふだんの日より余計にテレビをみるようになっている。」(注6)

島根の農山村地域の子どもについてみると，ふだんの日にほゞ半数のものが2時間以上の視聴を示しているが，3時間以上は2割程度に減少している。よくテレビッ子といわれるが，そのわりにはふだんの日にテレビをみる時間は多くない。また体位発達の型によってみると，下位地域の視聴時間量は男女ともに上位地域に比べて短くなっている。さらに，山村地域は近郊農村地域に比較して，男女ともに長時間視聴の比率は低い。これは，山村地域においては可視聴のチャンネル数が少ないことも関連していると考えられる。

次いで，日曜のテレビ視聴時間について，週日と比較してみると，視聴時間量は激増してい

る。4時間以上視聴するものは全体の約半数を占め，とくに長時間視聴者の割合は男子に高率である。長時間視聴者の割合が体位発達では上位地域，農山村の別では近郊農村で高率をみせているのは週日とほぼ同様である。

第7表　テレビの視聴時間　(%)

性別	地域類型	調査対象人員	週日，休日 / 視聴時間	週日 1・00時間以内	週日 1・00～1・59	週日 2・00～2・59	週日 3・00～3・59	週日 4・00時間以上	休日 1・00時間以内	休日 1・00～1・59	休日 2・00～2・59	休日 3・00～3・59	休日 4・00時間以上
男子	下位地区	191		13.0	41.8	25.2	10.5	6.8	2.1	11.0	28.8	13.6	50.2
	上位地区	102		4.9	28.4	28.4	20.5	11.8	4.9	4.9	14.7	20.5	56.0
女子	下位地区	172		18.7	38.8	24.6	6.4	11.1	2.4	15.2	21.6	21.0	37.4
	上位地区	82		8.5	20.7	41.5	17.1	6.1	2.4	7.3	22.0	15.8	50.0
男子	山　村	153		11.8	43.2	24.9	9.2	9.2	1.3	10.5	17.0	20.3	47.7
	近郊農村	140		8.5	30.7	27.9	19.2	7.9	1.4	7.1	17.8	11.4	60.0
女子	山　村	130		17.7	37.7	29.2	6.2	7.7	3.1	13.1	27.7	16.9	37.7
	近郊農村	124		12.9	26.7	30.6	13.7	11.3	1.6	12.1	15.3	20.1	45.2

2.　子どものスポーツ活動の現状

(1)実施の有無と実施程度

①実施の有無について(第8表)

下位地区，上位地区，山村，近郊農村いづれも80%以上のものが「たびたび実施している」。「実施していない」ものについてみると男子よりも女子の方が多く，又，男子においても上位地区，近郊農村より下位地区，山村の方が少し多くなっている。

②実施日数について

一週間のうち，2日～3日以上実施しているものが75%以上あり，なかでも男子においては，いづれの地区も85%～90%近くあり，女子よりも活発な活動状況をうかがい知ることができる。しかし「ほとんど毎日実施している」ということになると，男女差，地域差があらわれ，男子の上位地区，近郊農村と，下位地区山村との間に関して，上位地区，近郊農村が実施状況はよい。女子においては，男子とは反対の傾向があらわれている。

一回の実施に関しての消費時間は，50%以上のものが40分程度の実施状態で，特に女子については近郊農村（74.4%）を除いた各地区とも80%以上が40分程度の実施状態である。従って1時間から2時間位実施しているとするものは，男子12%～16%と低く，女子においては4.6%～5.8%と低率を示している。

③運動仲間について

子どもが遊びにおいて作る集団は，同学年だけの集団は少なく，地域的なつながりによって作る集団が一般に多く，集団成員の年令には相当の巾があるといわれている。(注7) 今回の調査では（第9表）男女とも，同学年の友達（45%～60%）で活動することが多く，次に，同部落の友達（30%～42%）となって，前掲書の傾向に近づいている。しかし，調査地区においては，同学年の友達と活動することが多いとなっていることは，活動の場が大きく影響していると思われる。又構成された運動集団は，男子（46%～52%）女子（40%～50%）と大半決まった成員で構成されている。

第8表

性別	地域類型	調査対象人員	運動実施			実施回数						1回に費す時間（実施時間）						
			いるたびたび行なって	行なっていない	無答	ほとんど毎日	週に2～3回	週に1回程度	月に1～2回	毎日	無答	0～20分	21～40分	41～60分	1時間～2時間	2時間～3時間	3時間以上	無答
男子	下位地区	191	91.6	7.3	1.1	58.1	30.4	8.4	2.1	0.5	0.5	30.4	26.7	20.0	13.1	6.8	3.0	0
	上位地区	102	93.1	3.9	3.0	65.0	24.0	4.0	3.0	1.0	3.0	20.0	33.0	19.0	16.0	6.0	2.0	4.0
	山村	153	90.8	7.2	2.0	54.9	35.3	6.5	1.3	0.7	1.3	28.1	28.1	16.3	15.7	7.8	3.3	0.7
	近郊農村	140	93.6	5.0	1.4	65.7	20.0	7.1	3.6	0.7	2.9	25.0	29.3	22.9	12.1	5.0	3.6	2.1
女子	下位地区	172	81.3	18.7	0	31.0	49.0	14.6	1.8	1.8	1.8	40.8	30.8	20.1	5.3	0.6	0.6	1.8
	上位地区	82	78.0	19.5	2.5	34.1	42.7	8.5	12.2	1.2	1.2	50.0	30.5	12.2	4.9	0	0	2.4
	山村	130	81.5	17.7	0.8	33.1	47.7	11.5	5.4	2.3	0	46.9	27.7	19.2	4.6	0	0.8	0.8
	近郊農村	124	78.9	20.3	0.8	30.9	46.3	13.8	4.9	0.8	3.3	40.5	33.9	15.7	5.8	0.8	0	3.3

第9表

性別	地域類型	調査対象人員	運動仲間は決っているか					運動仲間				
			大体決っている	ときどき変る	たいていひとり	いないとくに決まって	無答	同部落同学年	同部落の友達	同学年の友達	兄弟と	無答
男子	下位地区	191	46.6	27.7	6.8	18.8	0.1	8.4	33.5	55.5	0	2.6
	上位地区	102	52.0	17.6	5.9	21.6	2.9	5.9	37.3	50.9	2.0	3.9
	山村	153	50.3	26.8	5.2	17.0	0.7	4.6	42.0	48.4	1.2	3.8
	近郊農村	140	46.4	21.4	7.9	22.9	1.4	10.7	27.1	60.0	0	2.1
女子	下位地区	172	41.2	27.1	10.0	20.6	1.1	12.2	36.7	47.8	0	3.3
	上位地区	82	40.2	20.7	4.9	30.5	3.7	9.8	30.5	56.1	0	3.6
	山村	130	46.9	20.0	7.7	23.1	2.3	9.2	36.9	50.8	0	3.1
	近郊農村	124	34.4	30.3	9.0	24.6	1.7	14.8	35.2	45.9	0	4.1

このことは，運動の仕方，種目とも関係があると思われる。即ち，地域における運動集団の構成は，年令差，能力差が比較的大きくなり，加えて，集団の大きさも地域の人口傾向からみて，相当規定されよう。このことは，実践できる運動種目や運動の仕方をも規定してくる。ここでは，サッカー・野球は，家庭に帰ってからゲームを行なえない現状で，当然，学校に集まり実施するようになる。家庭では，継続的に組織だった運動実践はなかなかむつかしいと思われる。

(2)実施場所と実施種目

①実施場所について（第10表）

第10表

運動場所 / 調査対象人員 / 種類 / 地域類型			運動実施場所											利用度の高い場所（◎印のついた所）								
			家	道路	あき地や広場	学校	山	川（河原）	神社・寺	公民館	田畠	その他	無答	家	道路	あき地や広場	学校	山	川（河原）	神社・寺	公民館	田畠	無答
男	下位地区	191	27.8	5.2	12.9	41.4	1.6	1.0	4.5	4.5	0	0	1.0	22.3	4.6	9.1	52.0	1.1	0	4.6	2.9	0.6	2.8
	上位地区	102	28.5	6.5	13.4	30.6	6.5	4.3	6.5	0	0	0	3.7	9.2	4.1	6.1	64.3	1.0	1.0	1.0	1.0	12.2	0
	山村	153	24.8	6.0	11.9	36.4	4.3	3.3	3.9	1.0	7.6	0	0	13.0	6.1	8.4	62.6	0.8	0.8	1.5	0.8	6.0	0
	近郊農村	140	29.1	4.5	13.2	34.1	1.8	0.5	6.4	5.0	0	0	4.5	21.8	2.8	7.7	50.0	1.4	0	4.9	2.8	3.5	5.1

運動場所 / 調査対象人員 / 種類 / 地域類型			運動実施場所											利用度の高い場所（◎印のついた所）								
			家	道路	あき地や広場	学校	山	川（河原）	神社・寺	公民館	田畠	保育所	無答	家	道路	あき地や広場	学校	山	川（河原）	神社・寺	公民館	田畠	保育所	無答
女	下位地区	172	40.4	3.7	4.4	36.3	1.5	0.4	5.6	1.5	4.1	0.2	1.9	32.4	5.4	3.4	41.2	2.7	0	3.4	2.0	4.7	2.0	2.7
	上位地区	82	39.2	4.1	3.1	40.2	0	1.0	5.2	3.1	4.1	0	0	33.3	2.8	1.4	47.2	0	0	2.8	0	2.8	1.4	8.3
	山村	130	38.6	4.5	5.4	37.1	0.5	1.0	5.4	1.5	5.9	0	0	34.0	4.1	3.1	45.4	0	0	5.2	1.0	7.2	0	0
	近郊農村	124	40.4	2.9	2.3	36.3	1.8	0	5.3	2.3	1.8	0	6.9	32.8	5.0	2.5	42.9	3.4	0	1.7	1.7	1.7	0	8.3

男女，各地区とも「学校で実施」とするものが30.6%～41.4%となって，子どものスポーツ活動を成立させる基礎的条件として学校の役割は大きいことを示している。次に家（24.8%～40.4%）となって「子どもの活動の中心は家にある」(注2)と竹之下調査報告の一般特性の一端をうかがい知ることができる。男女別では，あき地や広場男子（11.9%山村～13.4%上位地区）と，女子（2.3%上位地区～4.5%山村）の間に開きがある。これも，男女間の活動の仕方，運動種目，等が影響していると思われる。上位地区と下位地区のみに視点をあわせると，男子に於て，やや下位地区が学校利用が多く，女子に於ては，逆に上位地区がやゝ多い。

②実施種目について（第11表）

男子においては上位地区の野球（23.8%）を筆頭にサッカー・バスケットボール・ソフトボ

第11表

	運動場所 / 種類 / 調査対象人員 / 地域類型		運動実施			実施 1位（実施順序）							
			いるたびたび行なって	行なっていない	無答	サッカー	野球	バスケットボール	ソフトボール	卓球	すもう	陸上競技(走)	その他
男	下位地区	191	91.6	7.3	1.1	15.6	5.2	15.0	12.7	16.8	2.9	9.9	21.9
	上位地区	102	93.1	3.9	3.0	21.6	23.8	7.9	3.4	9.1	9.1	6.9	18.2
	山村	153	90.8	7.2	2.0	10.3	17.2	2.1	12.4	6.2	9.0	15.1	27.7
	近郊農村	140	93.6	5.0	1.4	22.1	3.6	22.1	5.0	20.0	0	4.3	22.9

	運動場所 / 種類 / 調査対象人員 / 地域類型		運動実施			実施 1位（実施順序）								
			いるたびたび行なって	行なっていない	無答	バレーボール	バスケットボール	陸上競技(走)	体操	バドミントン	なわとび	卓球	鉄棒(低)	その他
女	下位地区	172	81.3	18.7	0	13.7	13.7	11.0	5.5	1.4	28.1	2.7	1.4	22.5
	上位地区	82	78.0	19.5	2.5	26.9	3.0	19.4	4.5	7.5	9.0	3.7	7.5	18.5
	山村	130	81.5	17.7	0.8	15.0	0	21.4	4.2	3.3	17.5	1.7	5.0	31.9
	近郊農村	124	78.9	20.3	0.8	16.3	17.9	5.9	6.5	2.4	21.1	3.3	0	26.6

ール・陸上（走）・卓球・すもうが上位を占めている。地区別では，上位地区・近郊農村が，下位地区・山村より，チームを編成して活動する種目の実施率が高くなっている。女子においては，各地区とも，バレーボール・なわとび・陸上（走）が多く，バスケットボールに関しては近郊農村，下位地区の実施率が高くなっている。

各地域について全般的に最近のスポーツ普及傾向があらわれているが，チームを編成し活動を展開していることは，実施の仕方に計画性，継続性を期待できる一つの条件を示していよう。ただ，女子において，なわとびが，下位地区（28.1%）近郊農村（21.4%）と相当多い実施率を示している。このことは，学校体育の影響と同時に，男子に比較して，運動集団の大きさ，集団構成に関しての積極性等の差が影響しているのではなかろうか。

(3)運動用具の実態

日本の家庭では，いろいろな運動用具をそなえている。その種類や数は子どもの年令や数，

種目																	
2位									3位								
サッカー	競上競技(走)	野球	すもう	ソフトボール	卓球	ドッヂボール	バドミントン	その他	ソフトボール	卓球	サッカー	陸上陸技(走)	ドッヂボール	バドミントン	鉄棒(低)	なわとび	その他
14.4	4.6	16.7	5.2	4.6	4.6	5.7	1.7	42.5	10.6	7.5	4.3	6.8	4.3	1.8	1.8	4.3	58.6
11.3	3.3	1.1	7.9	12.5	11.3	13.6	5.6	33.4	23.8	8.0	2.2	2.2	2.2	2.2	2.2	4.5	52.7
8.6	5.7	10.1	5.7	9.9	6.5	9.3	5.0	39.2	15.1	5.0	2.6	5.7	1.4	2.1	2.6	2.6	62.9
17.6	2.3	12.2	6.1	4.6	6.9	6.9	0.8	42.6	12.1	8.6	5.7	3.6	5.0	1.4	0.7	5.0	57.9

種目															
2位									3位						
なわとび	バドミントン	バレーボール	卓球	陸上競技(走)	体操	ドッヂボール	鉄棒	その他	なわとび	バレーボール	バドミントン	卓球	陸上競技(走)	鉄棒(低)	その他
20.1	5.7	7.5	3.1	4.8	3.1	2.5	8.2	45.0	6.1	6.8	5.3	6.1	2.1	2.2	71.4
16.4	9.0	7.5	7.5	4.5	4.5	6.0	3.0	41.6	13.4	7.5	3.0	4.5	3.0	7.5	61.1
12.7	7.9	7.1	4.0	4.0	3.2	4.0	7.9	49.2	9.8	5.4	4.5	2.7	2.7	5.4	69.5
26.5	4.9	7.8	4.9	3.9	3.9	5.6	4.9	37.6	4.9	6.5	3.3	8.1	2.4	1.6	73.2

親のスポーツ歴，地域の特性など一様でない。しかし，その大部分は子ども用のものが多い。家庭にどのような運動用具があるかは，その家庭のスポーツ参加の現状を知るための手がかりを与えるものである。

①家庭にある運動用具（第12表）

男子の家庭においては，各地区とも，野球型の用具保有率が他の種目の用具に比較して高い。次に手軽に行なえる運動として，バドミントン，なわとび，卓球用具等となっている。又，野外において行なわれる種目，スキーについては，山村が他地区より高く，地域の特性をうかがうことができる。

女子においては，男子の家庭と比較するとやゝ低いとはいえ，やはり野球型が多く，次になわとび，バレーボール，バドミントン，卓球用具となっている。このうち，なわとびの保有率が高いことが注目されるが，子どもと家庭の運動用具との関係をうかゞい知ることができる。

第12表

運動場所	調査対象人員	家庭にある運動用具										
地域類型	種類	ラケット(テニス)	グローブ	ボール(野球型)	バット	ラケット バドミントン	卓球ラケット	なわとび用縄	バレーボール	スキー	エキスパンダー	その他
男 下位地区	191	12.3	19.0	13.9	10.6	7.4	8.0	11.9	3.1	5.4	1.1	7.3
男 上位地区	102	14.4	17.4	15.8	10.4	10.2	5.3	11.6	2.8	1.1	1.9	9.1
男 山村	153	11.4	18.9	17.4	10.2	8.8	5.8	11.2	2.0	6.1	0.6	7.6
男 近郊農村	140	15.3	17.6	10.4	10.8	7.6	8.2	12.4	4.3	1.0	2.4	10.0

運動場所	調査対象人員	家庭にある運動用具										
地域類型	種類	ラケット(テニス)	グローブ	ボール(野球型)	バット	ラケット バドミントン	卓球ラケット	なわとび用縄	バレーボール	ドッヂボール	スキー	その他
女 下位地区	172	7.8	8.0	15.2	6.3	11.0	10.4	20.3	9.9	2.6	3.3	5.2
女 上位地区	82	11.7	9.4	15.9	7.8	16.0	6.2	18.2	9.8	3.3	0	1.7
女 山村	130	7.2	9.8	16.1	7.6	13.8	6.8	19.7	9.6	3.4	3.0	3.0
女 近郊農村	124	11.8	7.0	14.7	5.9	11.5	11.5	19.3	10.2	2.1	1.1	4.9

この他，ゴルフ，筋力補強具，剣道防具等，男女を通じて，家族の運動傾向を示すものが二三含まれていた。

②自分の運動用具（第13表）

男子においては各地区とも，野球型が大変多い。次にラケット類，なわとびとなっている。女子においては，なわとびが断然多く，次にラケット類，ボール類となって，運動実践との関係をうかがわせる。

(4)行ないたい運動種目（第14表）

男女とも各地区の差が種目によってあらわれている。即ち男子，野球は，下位地区（11.9%）が上位地区（6.3%）よりも高く，近郊農村（16.7%）が山村（9.8%）より高くなっている。サッカーについては，下位地区（19.5%）と上位地区（1.7%）の間に約18%の差がある。

女子については，バレーボール・テニス・バトミントン・スキー・スケートと男子にあらわれたような地域差はみられない。

全般的に，子どもの一般的な運動傾向を示している。ただ近郊農村において，ボーリングに対する運動欲求があらわれているが，最近のボーリング場の近郊農村への進出，加えてテレビ

第13表

運動場所	調査対象人員	自分の運動用具								
種類	地域類型	グローブ	バット	ボール(野球型)	ラケット	バドミントン	卓球ラケット	なわとび用縄	スキー	その他
男	下位地区 191	23.2	11.0	19.6	9.3	5.3	8.1	12.2	7.4	3.9
	上位地区 102	15.9	10.1	17.3	17.2	5.7	5.8	12.8	1.4	13.8
	山　村 153	22.4	9.6	21.5	11.2	5.4	4.0	12.4	8.6	4.9
	近郊農村 140	22.9	14.8	15.6	8.1	6.9	10.3	13.8	2.3	5.3

運動場所	調査対象人員	自分の運動用具								
種類	地域類型	ラケット	なわとび用縄	バドミントン	卓球ラケット	バレーボール	ドッヂボール	てまり	スキー	その他
女	下位地区 172	9.1	44.8	11.5	6.8	11.5	2.4	4.0	4.8	5.1
	上位地区 82	11.9	33.6	18.7	6.7	13.4	2.2	7.5	0	6.0
	山　村 130	8.4	34.7	18.3	3.2	15.3	3.5	9.4	5.0	2.2
	近郊農村 124	11.8	46.8	9.0	10.6	8.5	1.1	1.1	1.1	10.0

放送も少なからず影響していると思われる。

現代人の生活の中で，教育と余暇時間の占める割合は段々と多くなって来ている。そのうちで，スポーツや，活動的なレクリエーションに使用される割合は，各個人の社会的な環境条件に左右され，必らずしも一様ではない。当然子どものスポーツ活動もいろいろな条件に左右される。このことは前節でも述べて来た。こゝでは，特に，スポーツ活動（運動）に直接関係する施設，用具，運動仲間に視点をあわせて来た。

地域社会の運動施設は，学校や職場と異なり，その施設に誘引する対象の巾は広く，老若男女の区別なく，すべての人々を含まねばならない。従って，年令，性別，個人の趣味，生活の仕方などでいろいろ異なってくる。この異なった人々の活動欲求を満たすためには，施設の拡充整備が必要である。しかし，居住地域の広さ，人口密度，経済的条件などにいろいろ規定されよう。対象地区においても，子どもの運動欲求を満たすべき施設が，それぞれの地域に整備されていず，更に市街地域と比較して，空き地，広場が少ない。このことは，農村地区は，耕地との関係で，少しでも平坦な地域は農耕の立場から農地化し，子どもの遊べる土地は非常に少ない。従って子ども達の運動の場は自然と，学校，家の庭，神社，寺，河川敷に移り，特

第14表

運動場所	調査対象人員	種類	行ないたい運動種目があるか			行ないたい運動種目											
	地域類型		ある	ない	無答	野球	ソフトボール	サッカー	バレーボール	バスケットボール	バドミントン	テニス	スキー・スケート	水泳	卓球	ボーリング	サイクリング	その他
男	下位地区	191	58.1	38.7	3.2	11.9	8.1	19.5	1.6	5.9	3.2	3.2	11.9	4.9	6.5	0	0	23.3
	上位地区	102	59.4	34.7	5.9	6.3	5.4	1.7	2.5	2.1	0.4	2.1	0.8	4.2	0.8	1.3	1.3	71.1
	山村	153	56.2	39.2	4.6	9.8	12.3	14.8	1.6	6.6	0.8	4.1	5.7	9.0	2.5	0	2.5	30.3
	近郊農村	140	60.7	35.0	4.3	16.7	8.7	14.5	4.7	5.3	4.0	4.0	11.3	5.3	7.3	2.0	0	16.2

運動場所	調査対象人員	種類	行ないたい運動種目があるか			行ないたい運動種目										
	地域類型		ある	ない	無答	バドミントン	スキー・スケート	バレーボール	水泳	卓球	なわとび	バスケットボール	ソフトボール	ボーリング	テニス	その他
女	下位地区	172	57.3	41.5	1.2	10.0	13.3	17.8	4.4	5.6	2.8	2.8	5.0	0	11.1	27.2
	上位地区	82	45.1	47.6	7.3	7.7	7.7	10.9	7.7	13.8	6.2	7.7	3.1	7.7	9.2	18.3
	山村	130	46.2	51.5	2.3	9.8	3.9	18.6	1.0	7.8	5.9	2.9	5.9	0	14.7	29.5
	近郊農村	124	61.0	35.0	4.0	9.2	17.0	14.2	8.5	7.8	2.1	5.0	3.5	3.5	8.9	20.3

に学校の他は，運動の仕方にも大きな制限として影響してくる。又，運動集団も，学校での学習集団を，そのよりどころとしている傾向がみられる。子どもの健全なスポーツ活動（運動）を期待するならば，地域において，今一つ簡便な運動施設の整備が望まれる。

3.体位に関する上位地区と下位地区の子どもの生活実態の比較

一般に自己の身体についての客観的認識は，自己理解の指標ともなり，積極的，合理的な保健的生活の実践を導く源泉の１つになると思われる。

調査結果に関して評価的観点をとるならば，「身長」については男女とも体位上位群（以下，上位群という）の記銘度がたかい。（第15表）

「体重」は男子において上位群に記銘度が高く，女子では下位群が優っている。自分の「視力」の認識は男女ともに上位群がよい。

「ツベルクリン反応」の結果の認識は，上位群に確実度が高い傾向がみられる。

以上，身長・体重・視力・ツベルクリン反応結果の４項目の成績を綜合すると，女子の体重認識における下位群の優位傾向を除いて他は全く上位群が優れており，性別では全項目において女子がよい結果を得ている。

第15表

		(N)	身長 1 確実に知っている	身長 2 大体わかる	身長 3 わからない忘れた	身長 0 無答	体重 1 確実に知っている	体重 2 大体わかる	体重 3 わからない忘れた	体重 0 無答	視力 1 知っている	視力 2 わからない忘れた	視力 0 無答
男	下位地区	191	13.5	67.6	18.2	0	39.5	51.0	7.8	1.0	70.2	27.0	2.1
	上位地区	102	16.7	67.6	14.7	1.0	37.2	56.9	4.9	1.0	78.4	20.6	1.0
女	下位地区	172	12.8	61.0	25.0	0.6	50.0	43.6	6.4	0	71.0	29.1	0
	上位地区	82	14.6	72.0	13.4	0	45.1	45.1	9.8	0	80.5	18.3	1.2
男	山　村	153	13.1	68.6	18.3	0	28.8	61.4	8.5	1.3	71.9	26.1	2.0
	近郊農村(市)	140	16.4	67.1	15.7	0.7	50.0	44.3	5.0	0.7	75.0	23.6	1.4
女	山　村	130	11.5	62.3	25.4	0.8	35.4	54.6	10.0	0	71.5	27.7	0.8
	近郊農村(市)	124	15.3	66.9	17.7	0	62.1	33.1	4.8	0	76.6	23.4	0

次に日常生活における「起床時の感じ」で「気持ちよく起きられる」ものが約3分の1であり，男子の上位群が下位群に僅かにすぐれているが，「明らかに疲れている」ものが上位群に少し多い。性比では男子の疲労傾向が相対的に高かった。

「健康の自己評価」で比較的特徴的な傾向は，男子において「強い方」と評価する傾向が大きく，逆に女子では「弱い方」と評するものが多くなっていることである。そして，男子上位群に「強い方」が僅かに上廻るが，女子では全く差がみられない。総じて言えることは，性差が比較的著明にあらわれていることであった。

子どもの家庭における「タオルの所有」は日常の家庭での保健的生活の条件のひとつとして考えることが出来る。これまでの調査経験から，実態は意外と常識を越えた成績であることを確認している。何れの事例も「ない」とする方がはるかに多く，ここでは上位群に比して下位群の所有率が高くなっている。性差では女子の方が僅かによい結果を示している。これらは基本的に「両親の配慮」が関係しているとみることができる。

「歯みがき」は衛生習慣の主要な指標と考えられるが，男子において上位群が僅かに優れている。しかしその成績は50%に満たない。

また，女子は同じく上位郡が上廻っているが，概して実施率6割程度とみてよい。個別的な検討によると，大野・生馬地区が65%，持田・秋鹿の約38%が対照的な結果を呈している。食物の「好き嫌い」については男女とも上位，下位の地区間差はみられないが，女子にいく分多

くなっている。

身体に関する「悩み」については自由記述の方式をとったために，「悩み」や「心配だ」とする個人の意識内容を規定する規準もさまざまであるとみられるが，回答の整理から次のような分類がえられた。すなわち，①発育，発達　②体力　③疾病名を具体的にあげるもの　④症状の訴え　⑤疲労～体質がその主だったものである。

回答度数の最も顕著なものは，発育，発達に関する事項に集中しており，身長，体重によって代表される。(第17表)総じて下位地区群の訴数が著明である。個別的には，とくに身長に関しては，松江市生馬地区に最頻値がみられ，下位地区全体の訴数，男子16例中9例，女子17例中6例を占めている。(注2)

次に，「自分にとって，よいからだをつくるために必要なこと」については，次のような傾向がみられた。すなわち，①栄養に関すること，②運動（遊び）に関すること，③睡眠に関すること，④衛生的習慣に関することの四つに大別出来た。

「栄養摂取」および「睡眠」については上位群が，「栄養のとり方」（好き嫌いしない）については下位群が優り，比較的顕著な差を示しているが，人数全体に対する割合いは必ずしも大きくはない。

これら調査内容全般の意義について言及するならば，調査結果の示す個々の項目の成績は，子どもが社会（家庭や学校）からうける知識的影響や要請される文化（生活行動）の型の相違

第16表

		(N)	ツ反応結果					起床時のかんじ				健康の自己評価				タオルの所有		
			1	2	3	4	0	1	2	3	0	1	2	3	0	1	2	0
			陽性	疑陽性	陰性	わからないすれた	無答	気持ちよく起きられる	少しかんじ疲れている	疲れている	無答	強い方だ	普通だと思う	弱い方だ	無答	有る	ない	無答
男	下位地区	191	47.8	9.4	10.4	29.1	2.6	28.1	58.8	12.0	0.5	22.9	64.5	12.0	0	46.3	1.55	1.6
	上位地区	102	56.9	5.9	14.7	21.6	1.0	34.3	50.0	14.7	1.0	26.5	60.8	11.8	1.0	33.3	66.6	0
女	下位地区	172	43.0	8.7	12.2	34.9	1.2	33.1	61.6	4.1	1.2	12.2	66.3	20.3	1.2	47.7	51.7	0.6
	上位地区	82	65.9	1.2	7.3	25.6	0	32.9	58.5	8.5	0	12.2	67.1	20.7	0	39.0	58.5	2.4
男	山村	153	45.8	11.8	17.0	24.8	0.7	29.4	56.9	13.1	0.7	26.8	62.1	11.1	0	37.9	62.1	0
	近郊農村(市)	140	57.1	4.3	6.4	28.6	3.6	31.4	55.0	12.9	0.7	21.4	65.0	12.8	0.7	46.4	51.4	2.1
女	山村	130	46.9	4.6	14.6	33.1	0.8	40.8	55.4	3.1	0.8	10.0	66.9	23.1	0	44.6	55.4	0
	近郊農村(市)	124	54.0	8.1	6.5	30.6	0.8	25.0	66.1	8.1	0.8	14.5	66.1	17.7	1.6	45.2	52.4	2.4

およびその接触の程度によって微妙に変化するものであるから，全体としての環境の差が結果の差を生み出していることが容易に察知される。しかしながら，いわゆる「体位」における優劣の地区間差の事実性とこれらの成績の間に因果関係を想定することはできない。したがってここでの目標は体位の優劣に直接的関連を求めるのではなしに，当該地区の斯面の実態を事実として示すことである。

4．山村と近郊農村の子どもの生活実態の比較

ここでは山村の子どもと都市近郊農村の子どもの生活実態を比較し考察を進める。

現代の社会で子どもが健康で安全な生活を送って行くためには，まず，健康で，しかも強健なからだをもっていることが基本的条件となる。そのような条件のもとでは，自己のからだに対する認識を常にもっておくことが必要である。そこでここでは，まず，そのような観点から自分の身長についての認識度を問うた。

自分の身長に関しては第15表の如く「確実に知っている」ものは山村・近郊農村共ほとんど地区間差は見られないが，やゝ性差による違いが現われており，女子の方が「確実に知っている」割合が高い。また「わからない」「わすれた」とするものが山村に多く，地区間差がでている。しかし，地区別に見ると，大野・生馬両地区での成績は「確実に知っている」ものが男子では多少良くなっているが（17.1%），女子ではむしろ持田・秋鹿地区（17.2%）より悪く（13.3%），この地区で昭和44年以来行なわれてきた「体位向上運動」(※注8)が，いまだ大人のレベルにとどまり，子どもにまで浸透していないことを表わしているものと見ることができよう。

このことは，これまで地区レベルの「活動」ではあったが，子どもは受身的であり，自分たちのこととして受けとめていないように思われる。今後は子どもたちに対しても積極的な働きかけが必要で，子どもたちに体位を向上させようとする心構えを作らせることが大切であろう。

また，山村の子どもの意識が低いことは，これまで自覚的に自他の「からだ」について科学的な比較評価を試みる経験に乏しかった結果であると思われる。

体重については第15表の如く，地区間差が大きく現われている。すなわち，近効農村の子どもは男女共50%以上のものが「確実に知っている」といっているのに対し，山村の子どもは，30%前後にとどまり，大きな開きがある。しかし，これをさらに地区ごとに分析してみると，養護教諭の配置されている吉田・大野・生馬・秋鹿・持田の5地区は良い成績であるのに対し，いまだ養護教諭の配置されていない口羽・中野・志学・池田の4地区は劣るという結果がでている。近年，都市部の子どもに多くみられる肥満傾向に対する関心が高いために，自己の体重に関して良く認識しているのか，或は養護教諭が配置されているために，毎月体重測定がなされ，その結果このようになったのかは，この調査だけから結論をだすことはできない。しかし，養護教諭が全学校に配置されれば，学校保健はさらに発展することは疑いのないところである。

視力検査結果に対する認識については第15表の如く，山村の子どもの認識がやゝ劣る傾向を示してはいるものの，いずれの地区も70%を越えた成績で「知っている」。このことは近年の

近視の増加傾向や長時間のテレビ視聴などが子どもに視力に対して関心をもたせている原因ではないだろうか。

ツベルクリン反応検査結果では第16表の如く近郊農村の子どもに陽性者が多く，山村の子どもに陰性者が多くいるという結果は当然であろう。ツ反応検査結果に対する認知度が，他の検査項目と比較して「わすれた」「わからない」とするものが多く，山村男子の4人に1人というのがもっとも少なく，山村女子にいたっては3人に1人が「わすれた」「わからない」といてっいることは，近年，結核の患者や死亡者が減少してきているとはいえ問題である。

自分の健康度の判断を起床時の疲労感との関連においてたずねたところ，第16表の如く，男子では3人の内2人までが「少し疲れている」或は「疲れている」と感じている。女子では山村の子どもの約40%のものが「気持よく起きられる」と感じており，「疲れている」と感じているものは，わずか3%程度に過ぎない。それに対して近郊農村の女子では「気持よく起きられる」ものが25%で，4人に1人程度で，あとの3人は「少し疲れている」或は「疲れている」と感じている。

健康に対する自己評価をさせてみると第16表の如く，山村女子では「自分は強い方だ」と考えているものが10%程度であるのに対し，「弱い方だ」と考えているものが4人に1人もいることは，「起床時の感じ」と並列的には比較出来ないが問題がありそうである。

総理府が昭和40年に実施した国民の健康意識調査によると「健康である」と答えたものが，18〜19才の男子では82.6%，女子では80.0%となっており，60才以上になると，それぞれ59.3%と36.8%となり，年令が増えるにしたがって「健康である」と思っているものの割合が低下し，「あまり健康でない」ものの割合が増加してくる傾向があることが指摘されている。本調査の10〜12才では「強い方だ」「普通」を「健康である」とみなし合計すると，男子では山村で88.9%，近郊農村で86.4%，女子では山村76.9%，近郊農村80.6%となっている。しかし，「弱い方だ」と思っているものが男子では山村11.1%，近郊農村12.9%もいる。この数字を先の総理府調査と比較すると40才台とほぼ同程度（11.0%）となる。女子では山村の23.1%は40才台（23.0%），近郊農村の17.7%は30〜34才の15.6%を上回った数字となっており，いずれも「健康」に対する自己評価は「辛い」傾向にある。

健康生活実践の基盤である衛生思想の普及度を知るために，タオルの所有状況や歯みがき習慣をたずねた。

まず，タオルの所持率をみると第16表の如く約40%前後しかなく，半数以上の子どもの家庭ではタオルを共同しているという結果がでた。このことは各種の皮膚病や眼病等の伝染性疾患をひき起こす可能性が強く，早急に解決すべく衛生思想の普及をはかるべきであろう。

歯みがき習慣についてみると，(第17表)「毎日みがく」ものが男子では山村で49.0%，近郊農村で37.9%，女子でも66.2%と50.8%と，いまだ約半数の子どもが「毎日」みがいていない。また「ほとんどみがかない」ものが男子で8.5%と17.1%，女子では1.5%と4.8%とさすが女

第17表

歯　み　が　き　習　慣　(%)

	(N)	男 毎日みがく	男 かないほとんどみが	(N)	女 毎日みがく	女 かないほとんどみが
下位地区	191	42.9	12.6	172	57.0	4.1
上位地区	102	45.1	12.7	82	62.2	1.2
山　村	153	49.0	8.5	107	66.2	1.5
近郊農村	140	37.9	17.1	104	50.8	4.8

からだについての悩み（発育・発達）　(人)

	(N)	男 身長が低い	男 太りたい	(N)	女 身長が低い	女 太りたい
下位地区	191	16	6	172	17	9
上位地区	102	6	4	82	5	2
山　村	153	13	10	107	16	6
近郊農村	140	9	0	104	6	4

第18表　健康・安全についてやかましくいう人
（　）内は%，父→その他の問は「有り」に対する%

		(N)	有り	父	母	父母	祖父	祖母	兄姉	その他	誰れもいわない	無記
男	下位地区	191	(86.4) 165	(13.3) 22	(61.8) 102	(10.3) 17	(3.6) 6	(12.1) 20	(1.2) 2	(2.4) 4	(13.1) 25	(0.5) 1
	上位地区	102	(68.6) 70	(14.3) 10	(67.1) 47	(4.3) 3	(7.1) 5	(18.6) 13	(5.7) 4	(4.3) 3	(30.4) 31	(1.0) 1
女	下位地区	172	(88.4) 152	(9.9) 15	(65.1) 99	(11.2) 17	(1.3) 2	(17.8) 27	(2.6) 4	(1.3) 2	(11.0) 19	(0.6) 1
	上位地区	82	(72.0) 59	(13.6) 8	(62.7) 37	(6.8) 4	(1.7) 1	(16.9) 10	(3.4) 2	(1.7) 1	(26.8) 22	(1.2) 1
男	山　村	153	(79.1) 121	(14.9) 18	(66.1) 80	(11.6) 14	(5.0) 6	(14.0) 17	(3.3) 4	(1.7) 2	(20.3) 31	(0.6) 1
	近郊農村	140	(81.4) 114	(12.3) 14	(60.5) 69	(5.3) 6	(4.4) 5	(14.0) 16	(1.8) 2	(4.4) 5	(17.9) 25	(0.7) 1
女	山　村	130	(82.3) 107	(10.3) 11	(63.6) 68	(14.0) 15	(2.8) 3	(19.6) 21	(2.8) 3	(2.8) 3	(16.9) 22	(0.8) 1
	近郊農村	124	(83.9) 104	(11.5) 12	(65.4) 68	(5.8) 6	(0) 0	(15.4) 16	(2.9) 3	(0) 0	(15.3) 19	(0.8) 1

（1人について回答数2以上のものも含む）

子には少ないが，近郊農村の男子で約5人に1人の割合で「みがない」ものがいるという事実があり，この面でも強力な保健指導の必要性があることを物語るものと思われる。

「毎日歯みがきをする」ものでも，具体的に「いつ歯みがきをするか」という問いに対して，

「朝食前」にするものがもっとも多く，第2位の「朝食後」或は第3位の「寝る前」を大きく引離している。歯みがきの目的には，う歯の予防・歯肉のマッサージ効果，清潔感による心理的効果などがあげられる。

「朝食前」の歯みがきでは，後二者の目的は達せられるにしても，肝心のう歯予防の目的——これがもっとも大切である——が達成できない。「朝起きて，歯をみがき，顔を洗って，ごはんを食べる」といったことを何の疑問もなく毎日繰り返して行なっていることは問題であり，養護教諭の配置されている学校でも，ほとんど変らないということは考えさせられる問題である。

食物に対する「好き嫌い」調査では，山村・近郊農村・男女を問わず，いずれも半数以上のもの（男子52.3%，65.7%，女子66.2%，71.8%）が「偏食有り」と答えている。しかも，女子にその傾向が強いということは，将来，家庭生活を営なんで行く上で問題がある。

家族の中で，「健康・安全」について一番やかましくいうのは誰れか，という問に対しては第18表の如く，当然の事として「母親」「父親」「祖母」の順で出てくるが，山村では「祖母」のウエートが高く，子どもの育児に対しても「祖母」の発言力の強さがうかがえる。

Ⅲ　要　　約

1. 強勉や手伝いなどの拘束的な活動の時間は山村地域において長く，テレビや運動・遊びなどの自発的（自由）な行動の時間は，近郊農村地域に長い。
2. 体位の発達による地域間差は，生活時間の上ではさして認められない。
3. 子ども達のスポーツ活動の場は，各地区とも，学校に集中し，仲間も同学年で構成している場合が多い。活動状況は上位地区，近郊農村がやや高い。
4. 実施時間については，各地区の差はみられない。特にテレビの普及が，子どもの静的遊びを増大させ，スポーツ活動の時間減少が目立つ。各地区とも男子に比較して女子は少ない。
5. 家庭の運動用具は，子ども中心の傾向が強い。男子の野球型，女子のなわとびの占める割合は各地区とも大きい。
6. 自分のからだに関する認識の実態は，概して良好とはいわれないが，地区群別にみると，上位地区ならびに近郊農村部がよく，項目全般に男子よりも女子の成績が上廻る傾向にあった。
7. 健康の自己評価では性別による差異が著明であった。
8. 保健衛生的行動習慣の確立にたいして必要な条件の整備（大人の責任），ならびに学校における養護教諭の配置の有無が重要な意味をもつのではないかということが推論された。

Ⅳ　結　　語

調査結果は要約の通りであるが，これらの結果から「子どもの生活」に関連するさまざまな

条件をみることが出来た。それは，子ども自身による主体的条件に対応する客体的，環境的条件の重要性をも多面的に示唆するものであった。しかも現実の生活の改善や健康の向上実現のために，環境や生活における諸条件を自づからのものとして主体に同化させるための努力こそ現実や未来にとって必要なことだということが示された。

「低体位地区」とは，まさに地域理解に於ける象徴的な意味を含むものであるが，われわれはそこにこれらの調査研究の経験を通じて，それぞれの関心にもとづいてその局面的理解の一部をべつ見したに過ぎない。しかしながら，極めて困難な「低体位性」そのものについての検討課題も，実は日常の生活自体に則する実践命題でもある。

第１報では両親の生活を中心に，今回は子どもの生活を中心に検討した。実はこの両者の生活の具体的な諸概念を力動的に関連づけることによって，より実質的な意義を加えることができるであろうと考える。その意味で，これらの調査は接近目標への第１次的端緒としての意義をもつものである。

内容的に，1.生活時間については團が，2.スポーツ活動については織奥が，３および４の保健衛生についてはそれぞれ福井，喜多村が中心になって担当した。

註(1)　ここでいう「体位上位地区群」とは，いわゆる低体位地区（体位下位地区群）に対する比較地区群の呼称であって，必ずしも体位が格別に優れた地区であることを意味しない。

(2)　生馬地区は，昭和44年度以来，地区公民館が中心となって，「学童の低体位対策事業」を計画し，地区組織活動として――学校を含めて――活動を推進させてきている。（このような活動実績との関連が暗示される。）

(3)　ＮＨＫ放送世論調査所『日本人の生活時間1970』　昭和46年p. 172

(4)　ＮＨＫ上掲書　p. 173～174

(5)　團　琢磨「最近のレジャー・ブームと子どもへの影響」教育心理Vol. 20, No. 10, 1972

(6)　ＮＨＫ　上掲書　p. 198

(7)　青木誠四郎　「児童生活の実態」

(8)　福井一明ほか，「学童の低体位地区に関する比較研究(1)」